

随想 モーツァルトとその父 生きる希望与える曲創造

田幸正邦



モーツァルトが父レオホルドの愛の下で創造した曲を紹介したい。作品は純粋で躍動感にあふれる一方、哀愁と郷愁に満ち、生きる希望を与える。

レオホルドは3歳のモーツァルトにほめ育てる教育法を実践する。5歳でピアノ曲、8歳で交響曲を作曲した。ヨーロッパ諸国で修行し、音楽・歴史・文化や6カ国語を習得する。

オーストリア宮廷作曲家の職に失敗した衝撃を、交響曲第25番ト短調に秘める(1773年10月)。第1楽章が映画「アマデウス」の冒頭に使用され、良く知られている。採用されたのはサリエリであった。

父の反対を押し切って元恋人(アロイス)の妹(コンスタンツ)と結婚する(82年7月)。姉ナンネルの結婚(84年8月)後、父をウィーンに招待してピアノ協奏曲第21番ハ長調に再出発を祝う(85年3月)。彼は3カ月間の滞在後、ザルツブルクに戻った。

父を不安視する中で、ピアノソナタ第14番ハ短調(第2楽章を後にベートーベンが悲憤ソナタに引用)、ピアノ協奏曲第23番ハ長調および第24番ハ短調(ベートーベンがピアノ協奏曲第3番に引用)、フィガロの

結婚(ベートーベンが2つの変奏曲に引用)、交響曲第38番「ラハ」ハ長調(ベートーベンがアンペストソナタに引用)、弦楽5重奏曲第4番(ト短調)等を創造して絶頂期を迎える。特に、第23番第2楽章は珠玉である。

しかし、レオホルドは財産の全てを娘にのこした(87年5月28日逝去)。勘当されたモーツァルトは悲しみのどん底で、歌劇「ドン・ジョバンニ」(ベートーベンが変奏曲に引用)の主人公に自身を、騎士長に父を移入して創造する(同年10月「ラハ」初演)。

ウィーン初演の時(88年5月)、父の夢を見るようになり交響曲第39番ホ長調に良き日を回想する(6月完成)。第40番ト短調に、前述の協奏曲第21番第1楽章のエピソード(ト短調)を引用して悲しみの中で泣き崩れる(ト短調は父の調性)。第41番ハ長調「ジュビター」の第4楽章に父の霊を慰め、祈りをささげて(フーガ)親不孝から脱却し(8月)、驚異の創造力を発揮する。

歌劇「魔笛」(ベートーベンが変奏曲に引用)の主人公に自身を、タミーナに妻を、夜の女王にアロイスを、ザラストロに父を移入してユートピアを創造した(91年9月30日)。モーツァルトとベートーベンを聴いてコロナ禍を乗り越えよう。

(沖縄市、沖縄ベートーヴェン協会会長、73歳)